

伝承探訪

都の乾に聳える愛宕山。水尾はその愛宕山の西南麓に位置する、古い山里である。嵯峨の鳥居本から西へ入って行く山道を、車で二十分あまり。保津峠を見下す細道を抜けると、水尾の里の斜面には昔ながらの家々や田畑が並んでいる。

清和天皇陵は里の西南、谷を隔てた清和山中腹にある。朝日の当たる、見晴しの良い山である。参道を一且下りて清流を渡れば、つづら折りの上り坂が続く。つやつやした石畳が敷かれ、苔がしつとりと隙間を埋めている。松と杉が茂り、羊歯のさやぐ山陵は、長い年月を里の人々の敬愛によって守られて来た。他所からやって来たものには、はかり知ることのできない、聖なる地に対する畏怖が、右の金鶏伝説につながる伝承の背後にはあったのである。

清和天皇は平安前期、異腹の兄の惟喬親王と皇位をめぐって争った。染殿皇后明子を母に、藤原良房を祖父に持つ権門の勢力を後継に、わずか九歳で即位し、

「貞観の治」と呼ばれる善政をしいた。しかし十八年後の二十八歳のとき、退位してこの水尾の寺へ入り、一時加療のために都へ戻るも薨去され、遺志によって遺骨を水尾山上へ葬ったといわれる。「源氏物語」に先行する王朝の長編『宇津保物語』には、貴宮への求愛に敗れた源少将仲頼が、惜しまれながら水尾の里に通世の庵を結ぶという一節が描かれる。水尾にはこのころ既に、現世と隔絶された別世界というイメージが、定着していたのであろう。訪れた人々は、都にいた頃とはあまりに異なる少将の姿を見て、涙を流したのであった。

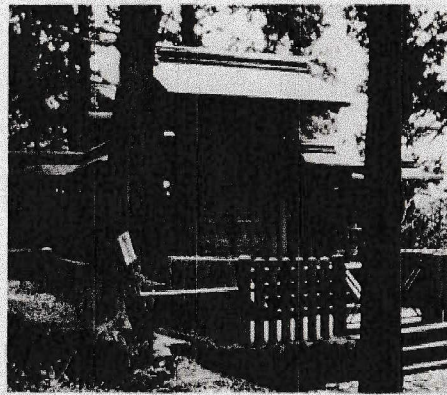
水尾の里の中央にある小学校の東側には、円覚寺と清和神社が並んでいる。清和天皇ゆかりの境内には、清和源氏の祖といわれる貞純親王塔をはじめ、源氏一族の供養塔も立つ。小学校の西側から北へ向かう山道は、愛宕山への参道。両側に石組の続く上り坂からふり返ると、光秀が亀岡へ敗走したという、明智越の陵線を間近に望む。かつては毎朝、櫓を頭に戴いた里人が、神前に詣でた道である。里に茂った櫓の枝は、現在でも日祝日には参詣者に授与されている。愛宕の

霊力の込められた、「火伏の神花」として拝まれた、常緑の枝である。

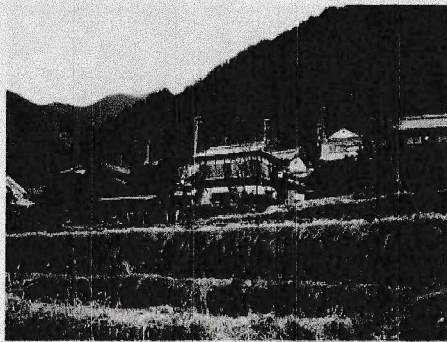
秋から早春にかけての水尾の里は、名物の柚子料理と柚子風呂でくつろぐ人々を迎える。やわらかな日差しを浴びて、たわなに実る黄金の実は、異郷の香りを

放ちつつ、ほのかに日を照り返している。

敗れて小野の里に隠棲した惟喬親王と、水尾に眠る清和天皇。二人の高貴な兄弟の伝説は、永い間京の北山一帯に、語りつがれて来たのであった。



清和天皇陵



水尾の里

